

令和6年度 学校経営報告書（自己評価）

学校番号	11	学 校 名	静岡県立藤枝特別支援学校	校 長 名	岩附 祥子
------	----	-------	--------------	-------	-------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況	評価	成果と課題
安全・安心	命を守る危機管理体制の整備と共有	・緊急時での自身の役割が分かり、具体的な行動を考えた教職員 100% ・担当する医ケア児の緊急時・災害時の用具の保管場所や扱い方についての研修を3回以上実施し、理解した担当者 100% ・ヒヤリハットの報告を自分が担当する活動場面に置き換えて対応を考えた教員 100%	・緊急時での自身の役割が分かり、具体的な行動を考えた教職員 99% ・担当する医ケア児の緊急時・災害時の用具の保管場所や扱い方についての研修を3回以上受講し理解した担当者 97% ・ヒヤリハットの報告を自分が担当する活動場面に置き換えて対応を考えた教員 99% ・命を守る体制が整備され、対応や情報の共有や発信がされていると評価する保護者 95%	A	・繰り返し訓練(各種避難訓練、不審者対応訓練、搜索訓練等)を実施し、避難の仕方や緊急時対応における役割等を理解できた。今後も具体的な想定のもと、実際の各種訓練を行いたい。 ・避難経路図と AED 設置場所は、どの教室でも共通の場所に掲示し、校内のどこにいても確認できるようになった。 ・学校周辺地域(藤枝市や大洲地区)との繋がりの強化と具体的訓練等を実現したい。 ・通学途中での発災に対する対応について整理するとともに、保護者や児童生徒と共有したい。 ・医ケア児の災害時用具については、実際に見て触る作業が有効だったため、今後も継続する。また、在校時のみならず、「一日の流れ」の確認は発災時には必要となるため、今後も確実に行いたい。 ・学年会でのヒヤリハットから学ぶ機会の実施できた反面、周知不足が反省点。周知の仕方や内容について、改善すべき部分を整理し続けていく。
	教職員一人一人の人権意識の向上と学校風土の醸成	・児童生徒への呼び方(さん付け)や口調、対応が常に人権を尊重したものになっていると答える教職員 100%	・児童生徒への呼び方(さん付け)や口調、対応が常に人権を尊重したものになっていると答えた教職員 100% ・教職員は人権に配慮した関わりをしていると評価する保護者 95%	A	・人権感覚チェックや人権だよりの発行、人権研修会の実施により、教職員の人権に対する知識や感覚を高めることができた。 ・教職員自らが児童生徒の一番身近な手本となる言動を今後も心掛けたい。 ・児童生徒による挨拶運動が学校全体に広がった。 ・「事務室は学校の玄関口」という意識をさらに高め、気持ちのよい来校者等の対応に心掛けたい。
	自己肯定感や人権意識の高い児童生徒の育成	・人権教育全体計画や実態に応じた年間指導計画の作成 ・自分や友達が互いに大切な存在であることを学ぶ機会を設定した教員 100%	・児童生徒自身や友達が互いに学ぶ大切な存在であることについて、学ぶ機会を設定した教員 99%	A	・人権教育全体計画及び年間指導計画を作成できた。次年度は、学習に活用できるよう周知するとともに、適宜の改善も行いたい。 ・学部や学年、学級の実態に応じて、日常的に自他を認める等の取組を行なっている。言葉で伝え合うことに加えて、掲示物等の具体物に残すなどの工夫もある。

様式第3号

	学習環境の整備と安全点検	・安全点検、スクールクリーンを効果的に実施し、整理整頓や環境整備のために行動を起こした教職員 100%	・安全点検、スクールクリーンを効果的に実施し、整理整頓や環境整備のために行動を起こした教職員 99% ・子どもが校内外で安全に活動するために、学校は環境整備や安全教育に取り組んでいると評価する保護者 95%	A	・毎月の安全点検に加えて、内容を具体的に示した「安全点検追加項目チェック表(5,9,1月に活用)」を作成。確認すべき箇所が明確になり、確実に点検できるようになった。また、修繕結果等を速やかに周知したことで、点検への意識付けに繋がった。 ・今後は、安全点検結果や環境整備の担当者だけでなく、学部や学年内で危険箇所等についての検討がなされるよう、働きかけたい。
	個別の教育支援計画と個別の指導計画に基づいた授業実践	・児童生徒の根拠のある実態把握、目標設定、達成するための具体的な場面を共通理解して、その目標達成に向けて取り組んだ教員 100% ・各教科等を合わせた指導の学習評価を実施できた教員 100% ・各教科等を合わせた指導の授業実践のために、教材研究等の授業準備の時間を前年度より確保した教員 100%	・児童生徒の根拠のある実態把握、目標設定、達成するための具体的な場面を共通理解し、その目標達成に向け取り組んだ教員 100% ・「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」に基づいた目標や学習内容から、子どもの成長を感じることができたと評価する保護者 96% ・各教科等を合わせた指導の学習評価を実施できた教員 93% ・各教科等を合わせた指導の授業実践のために、教材研究等の授業準備の時間を前年度より確保した教員 87%	A	・授業研究を通して「藤特スタンダード」(各教科の年間指導計画、各学年及び作業班の指導内容一覧)を活用した授業づくりが根付いた。校内研修から得られた成果について、わかりやすい発信に努めたい。 ・各教科等を合わせた指導の学習評価については、合わせた指導が二重構造であることや関連する教科の評価に難しさを感じている。来年度も継続して取り組み、理解を深めていきたい。 ・年間を通した計画的な「短縮週間」の設定は、一定の効果が得られている反面、その意図が十分に理解できていない反省点もある。今後は、効果的かつ計画的に活用していく方策を示し、意識をさらに高めたい。
授業	教職員の専門性の向上	・教材教具や ICT 機器を大切扱い、貸出や使用方法のルールを守って活用した教員 100% ・各種研修や自分からの学びを積極的に活用し、自身の指導力向上につなげた教員 100%	・教材教具や ICT 機器を大切扱い、貸出や使用方法のルールを守って活用した教員 99% ・静岡県教員育成指標の項目に応じた「藤特専門性チェックシート」を基に、各種研修や自分からの学びを積極的に活用し、自身の指導力向上につなげることができた教員 88%	A	・ICT 機器の利用頻度が上がったにも関わらずルールが守れた背景には、ヒューマンエラー情報や月末確認の共有が功を奏している。 ・自立活動に係る備品等については、学期毎の不具合や貸出の確認、修理の徹底、保管場所の整理等を確実にを行うとともに、ルールについてのアナウンスが有効だった。 ・体育課に係る用具等については、各倉庫に準備した「体育用具管理表」が有効だった。保管方法についても、ルールの徹底ができ、安全な学習環境を維持できた。 ・秋の読書週間に読み聞かせ(中学部図書委員会や級外教員による)を実施し、図書に親しむ契機となった。 ・「藤特専門性チェックシート」については、活用できていないと答える教員が約 11%いた。しかし、「藤特版キャリアステージ研修」の個人内成果の振り返りでは、年度当初と比較して大幅に向上しているという結果となった。

様式第3号

					これは、研修の目的や成果に対するアナウンス不足が大きな要因と考えられる。今後は、年度当初の投げ掛けに加え、所要所での情報発信や価値付け等の方策を講じる。
	学習と経験のつながりを意識したキャリア教育の実施	・「キャリア教育の手引き」を活用して生活年齢に応じた授業（日生、特活、道徳等）を行った教員 80%以上 ・懇談会や支援会議等の資料に活用した学年主任 100%	・「キャリア教育の手引き」を活用して生活年齢に応じた授業（日生、特活、道徳等）を行った教員 93% ・懇談会や支援会議等の資料に「キャリア教育の手引き」を活用した学年主任 100%	A	・手引きの配付や手引きの内容を踏まえた進路学習会の実施、学年主任や部主事からの手引き活用の働き掛け等が教員の意識につながった。今後は、手引きの内容の理解・促進に力を入れたい。また、ニーズを把握した上で、手引きに関する学習会の実施や手引きの内容についての具体例や補足説明等を適宜行い、教職員のキャリア教育に対する実戦力の向上を目指したい。
連携	地域資源を活用した共生社会の実現を目指し、保護者、関係機関、地域との連携・協同体制の充実	・交流関係者（相手校・保護者・担当者）が目的を理解して実施、参加し、その後保護者に対して地域での活動の紹介をした教員 70%以上 ・本校の良さを理解してもらうための工夫をして、効果的に情報発信をした教職員 90%以上 ・学校運営協議会制度への理解が進んだ教職員 100% ・地域とつながる授業を計画した学年主任等 90%以上	・交流関係者（相手校・保護者・担当者）が目的を理解して実施、参加し、その後保護者に対して地域での活動の紹介をした小中学部の教員 89% ・本校の良さを理解してもらうための工夫をして、効果的に情報発信をした教職員 92% ・居住地についての情報発信（イベント、行事、作品展等）が多くあったと評価する保護者 83% ・学校運営協議会の理解が進んだ教職員 81% ・地域とつながる授業を計画した学年主任等 100%	A	・交流籍を活用した交流及び共同学習においては、希望者は 100%実施できた。小学部が延べ 157 件（直接交流 131、間接交流 26）、中学部が延べ 62 件（直接交流 45、間接交流 17）実施。大変有意義な取組だが、保護者の理解や意識を高める方策が必要である。 ・地域での活動等の保護者への情報提供は不十分だった。早急に対応を明確にする。 ・学校ホームページを刷新し、より見やすく情報発信できた。今後はInstagramを活用したスピーディーな情報発信も取り入れる。 ・本校独自のホームページ計画に基づき全学部全学年に発信の機会を設けどの学習グループもほぼ均等に発信できた。 ・様々な地域の催し物（イベント、学習会、作品展等）は、全家庭へメール配信した。今後もタイムリーな情報発信を心掛けたい。 ・地域に出掛ける、地域の人と触れ合う、地域を知る、地域の人から学ぶ、地域で活動する、地域に伝える、地域に貢献する等々、地域とつながる授業は、どの学部においても年間を通して計画的に行なった。今後もカリキュラム・マネジメントの視点で、児童生徒の充実した学びに繋げたい。 ・正面玄関の壁面（校長室前）に、「コミュニティスクール掲示板」を設置。校内関係者のみならず、来校者が眺めてくれている。さらに充実していきたい。